



# 私が幼児教育を志した頃(5)

津守　真

## 米国と日本——占領軍による我が家の接收

昭和二十一年六月二十一日、我が家が占領軍に接收された。都内の焼け残った家は米軍に接收されるという噂はかなり以前からあつたが、私共が住んでいた家には、空襲で焼け出された近所の方の家族四人と、親戚の家族五人が同居していたから大丈夫だろうと思っていた。

最初に入ってきた米軍将校はコロネル・ド・ギャンと言つて、美人の奥さんと三歳の女の子との三人家族だつた。引っ越しがすむとじきに私共の家族はド・ギャン家に招かれた。占領軍将校といつても物腰は柔らかく、私共の方が主人であるかのように



丁寧なもてなしを受けた。私の父は第一次世界大戦直後に米国に留学していたので話がはずみ、接収前に抱いていた恐怖や不安はじきに解消した。最新の米国雑誌「ライフ」や「コロネット」「タイム」や「ニューズウイーク」なども、長い戦争の後には珍しく、手に取った紙の手ざわり、新着洋書のにおいが、空襲の頃とは全く違う世界に誘い込んでくれた。それでも座敷の床の間に家具が置かれ、床柱に白いペンキが塗られているのを見たときは、何か大切なものが失われたような気がして情けなかつた。それを英語で伝えることができなくてどかしかつた。家のなかにも靴のままで上がると自分の家なのに外国のような感じがした。コロネル・ド・ギャンから招待されたときには、普段出入りしていた勝手口ではなく、玄関の扉を開いて対等の客として迎えてくれた。もしも日本軍が占領したのだつたらどうだつたろうかと、しばしば私は対比して考えた。コロネル・ド・ギャンは、占領軍のカーキ色の軍服を着ていたが、米軍人と言つても歯科技工の技術者だったので、特別に軍人臭がなかつたのだろう。大学生だった私には、何でも好きな本をもつていってよいと言われていたが、私はむしろ三歳の女の子のサンドラと遊ぶのが楽しみでしばしば訪ねた。住み込みの若い日本人男性のMさんは、英語を勉強して留学することを目標にしていました。当時はこういう青年が好んで米軍の仕事をした時代で、その中から大成した方々を私は何人も知つている。

戦勝国と敗戦国の立場に目をつけて考えると、あの頃どうして屈辱感や敵意を抱か



なかつたのかと思うのだが、不思議なことにそういう感覚はなかつた。その頃の米国人には、戦勝国、敗戦国の別はあつても、人間は平等だという人間観をことさらに意識していたからだろう。復員したばかりの日本人学生にも、反米感情を起こさせるような出来事は都内では一般ではなく、むしろ戦時に「鬼畜米英」と言つた宣伝文句の方が嘘だつたと思った。一步街に出れば、米軍の焼夷弾によつていずこも焼け野原だつた。私の家は芝公園増上寺に近く、戦時中、本堂の裏側に建つていた「北の御靈屋、南の御靈屋」には四季折々に訪れた。いまの人が京都の寺を訪れるように、座敷に座つて庭を眺めた。冬の雪景色には特別の趣があつたがそれらもすべて灰燼に帰して、その記憶をとどめるものはなにも残されていない。こういうことを思うと日本は戦争に負けたことを改めて自覺させられ、幕末の攘夷論、開國論が身近に現在にまで尾を引いている日本の歴史を考えさせられる。日本人の心には矛盾する記憶が宿つていて、空襲で家族が死んだり、戦死者を出したり、人々のおかれた状況によつては米軍に対する感情が左に右に揺れることがあつても無理はないと思うのだが、同時に、アジアの人に対して日本人はもつと深い直接の傷を残していることを思い起こさないわけにはいかない。

コロネル・ド・ギャンの家族は二年ほどいて、次の家族に代わつた。それから数年たつて、私は米国に留学していた一九五一年九月、ワシントンD・C. の郊外にド・



ギャン家を訪ねた。私は「フレーベル以後の幼稚園」の資料を探してワシントンの国会図書館に一週間通っていたときである。緑の芝生に面してこじんまりした清潔な家が並ぶ米国の典型的な街並のなかだった。ド・ギャン家は夫婦とも仕事をもつていて、十歳になつた娘のサンドラは学校から帰つても一人だつた。母親は相変わらずヒステリックで、娘は寂しさが全身に溢れていた。翌日はミネソタに帰るという私の傍らを離れないで、夕方薄暗くなるまで、一緒に家の前の階段に腰掛けて空を眺めていた。私は心を後ろに残しつつ、ド・ギャン夫婦が帰宅される前に辞去した。

### 復員運動

昭和二十一年、中国、満州、朝鮮、台灣、また南方から、毎日のように復員の兵隊と引揚げの民間人を満載した船が舞鶴や横須賀に入港した。私の兄は昭和十七年九月に大学を卒業し、直ちに歩兵第三聯隊に入隊した。昭和十七年は、大学生の徵兵延期の特權がなくなつて卒業も半年早くなつたのである。兄は同じ年の十月にスマトラ島にゆき、一兵卒のまま終戦を迎えた。多くの兵隊たちが帰国したが、敗戦から一年たつても兄は帰らなかつた。ある日、スマトラにいた同じ部隊の人が私共の家に訪ねて来て、兄の乗つた船は途中シンガポールに寄港し、そのまま英軍の捕虜になつたのだという。両親も私共も非常に心配した。私の高等学校の一年先輩のIさんの実兄も同じ部隊だつたことが分かり、私共は復員運動をはじめた。学生食堂で配給米と引き



替えに食券をもらつて昼食を食べながら対策を練り、東大正門前で連日チラシを配り、署名を集めた。当時の考えでは、復員船が途中で抑留されたら、シベリアでも南方でも、兵隊たちは日本に帰れるのかどうか確かでなかつた。私共は切迫感をもつていた。集めた署名をもつて三宅坂の英國大使館にもつていつたが、それがどう処理されたのかも分からなかつた。

### レッドマン氏

私の父は、戦前、仕事の関係で英國大使館と関係があり、親しくしていたレッドマン氏が戦争が終わつて直ぐに英國大使館に戻られたことを知り、レッドマン氏を頼つて調べてもらつたらと考えた。

昭和二十一年十一月二十三日、私は父と共に英國大使館にレッドマン氏を訪ねた。昭和十年頃、レッドマン氏は私共の家にしばしば訪ねて来られたのを私は覚えてい る。奥さんは愛想のいい金髪のフランス人で、私共の家にはいつも夫妻で来られた。その日には、母は早くからよそゆきの着物を着てそわそわしていた。私と妹もときどき呼ばれて、応接間のソファにかしこまつて座り、英語やフランス語の会話を聞いていた。銀座の木挽町生まれの母はハイカラなものが好きで、レッドマンの奥さんからフランス語を習うのがみだつたらしい。戦争の波はまだ日本人の日常生活には及んでおらず、外国人が家庭に来るのは現代ほど当り前ではなかつたにせよ、対等の



つきあいがあつた時代だと思う。

戦争が終わつて久し振りに会つたレッドマン氏の風貌は少年の頃の私の記憶とは違つていた。もともと顔に皺の刻まれた、英国人にしては小柄な人だつたが、今回会つたときには前歯が欠けていて、一層複雑に皺が目立つて見えた。太平洋戦争開戦後、日本の憲兵に引っ張られて、拷問を受け、前歯を折られたのだという。私にはその事実が強烈で、どういう風に聞いたか正確な記憶がないのだが、戦時に見聞きしたことから、そこで起つたことが目に見えるようだつた。外交官にすら暴行を加えるという、国際法を無視し、外国人を人間扱いをしない、日本の社会に潜む偏狭な人間観を目の前に照らし出されたように思つた。外国人に対してもうけではない。「非国民」とレッテルを貼られて「内輪」から外されたとき、同じことが起つたのが私共の社会の歴史である。

兄の復員促進についての話が一通り終わると、私はレッドマン氏から大学で何を専攻しているかを訪ねられた。私が「心理学」と答えると、これから日本では、医者か弁護士でないと食つてゆけないと、断固とした口調で言つた。私は父とそのことを語りながら坂を上つて帰途についた。数日後、私は指導教官の高木貞二先生に医学部に転学の相談にいつたとき、後からの専攻の方が生涯の専門になるから、志をもつて勉学をはじめた者は、心を動搖させてはいけないと、普段は穏やかな先生からたしなめられた。医者も弁護士も社会で権力をもちやすい職業である。私は大地についた仕



事をしようと心に決めた。

その後、復員船入港の知らせを聞くたびに私は父と横須賀に出かけた。長い時間埠頭で待つたがいつも空しく帰った。

結局、兄が帰ったのは昭和二十二年五月十一日だった。私はその日のことを「久しく待っていた我が生涯の記念すべき日」と日記帳に記した。兄は床のなかで近衛公の手記を読んでいた。たばこの煙が青く渦を巻き、時計がかちかちと音をたてていた。兄はシンガポールでのことを聞いても多くは話さなかつた。ただあらゆる労働をしたと言つた。昭和二十一年の末から通訳に回され、全体に労働も楽になつたとのことだつた。陰からレッドマン氏の配慮があつたのは明らかだつた。

その後私は米国人には多くの友人ができたが、英国人には長い間近寄り難い感情を抱いていたことを否めない。三十年以上たつて私はOMEPにかかり、同じテーブルを囲み保育者の悩み、喜びを語ることのできる尊敬すべき英国人に何人も出会つた。マーガレット・ロバーツは、第二次世界大戦直後のヨーロッパの幼児のために働くいた英國人である。私が知り合つたのは一九八〇年代半ばで、幼児のためにはなりふりかまわずに情熱をもつて世界理事会で発言されることに感激した。「OMEPの歴史——最初の10年」の編集を世界理事会で提案し、見事にまとめ上げられた。マーガレット・ヒューズはいつでもOMEPの裏方で皆の励まし役であり、日本の世界大会をも陰で支えてくださつた。現世界総裁のオードリ・カーティスはユーモアとウ



イットに富んだ英國人で、多くの日本人留学生がお世話になつてゐる。こうして私はこれらの人々との出会いによつて長い間の英國人に対する先入観を改めることになつた。人と人が顔を合わせ、人間として直接に出会うとき、人は国籍を超えて友人をつくることができる。

「私が幼児教育を志した頃(1)」(本誌一九九九年十一月号)の原稿を書いていたとき、国旗国歌法案がたいした論議も経ないままに国会を通過しようとしていた。じきに法案は成立した。私の親しい友人の元裁判官Mさんは新聞の投書欄に「日の丸の掲揚じわり強制か」と題して投書された。これは協力の要請と言つても『『お上』からの命令として従わざるを得ない気持ちにさせられるのではなかろうか。それが、政府の意図するところだろう。協力の要請の実体は、協力の強制である』とMさんは記された。それから数ヵ月の間に、教育委員会や学校、官庁の行事など、その懸念に合致するような新聞記事が幾つも報道されている。戦後五十年もたつた今になつて、どうしてこういうことが起きるのだろうか。日本人の心の底に空襲や原爆の恨みや敵意が沈澱していく、それがいまになつて浮上してきたのだろうか。それが日本精神への復帰と結び付くのなら、世界に共通の人間精神の否定である。現在の政治の右傾化は、それが国際防衛戦略にとつて利用価値があるから許されている。日本の政治は教育に八つ当たりしているように見える。



恨みや敵意が日本人の心深くにあるかもしれない。歴史を考えればそれは当然であろう。しかしそれが偏狭なナショナリズムになつたら、私共はまた五十年前の軍国主義の社会に逆行することになる。何であれ、怨念を育ててはならない。もっと高尚で前進的な精神へと自分自身を向けること。それが文化と教養の力であり、教育に期待されるところである。幼児期に育てられ、青年期、成人期、老年期にまで磨き続けねばならない人間精神である。

この五十年の間に育つてきた世界の良識に目を向け、そちらに希望をつなごう。  
「子どもの権利条約」は、実行不十分とはいえ、いまや世界の常識になつたし、西暦二〇〇〇年は国連の「平和と非暴力の文化」十年の最初の年である。一九四五年当時とは違った世界になり、平和の定義も単純でなくなつてきたが、新しい世紀のはじめに、平和のための文化の創造を志すことは希望である。幼児教育にかかる者は、世界の保育者と協力してこの課題に目を向け、心を上げて日々の子どもの仕事をしよう。